

語る

昔昔、見られた見られたてあるう牛方の姿。先人から受け継いできた今の牛をわたしたちも引いていきましょう。前に前に—

この地の牛の今昔が熱い思いで語られる

村田 べっぴんの湯の食事は土や山のもの、海のものに比べて土や山のものにはお客さんの食いつきが弱いと感じていました。そこで通年で提供でき、ある程度の料金をいただける新し

元食材へのこだわりは。村田 べっぴんの湯の食事は土や山のもの、海のものに比べて土や山のものにはお客さんの食いつきが弱いと感じていました。そこで通年で提供でき、ある程度の料金をいただける新し

ら丸5年。短角牛の良さや特徴を理解してもらった上で買ってもらうため、最初は口こみにこだわりました。おかげで半年間、本当に厳しい経営でしたが、BSE問題で大手牛丼チェーン店の牛丼が販売中止になった際、国内産に目が向き新聞取材がきっかけで取り引き先が広がりました。現在の主な取り引き先は外食関係です。プロの方に調理してもらい短角牛の本当の魅力を消費者に感じてもらいたいと思っています。

また、ここ2、3年は産地から短角牛の食べ方を発信しようとしてレシピの提供や料理教室を開催するなどしています。市長 なるほど「消費者を育てる」という努力もしておられるんですね。皆さんの努力によって流通している短角牛を調理し提供するのが村田さんの役割ですが、短角牛や地元食材へのこだわりは。

これが今の闘牛のルーツです。闘牛は牛の習性を心得た牛方たちの知恵でもあったと思っています。市長 ありがとうございます。改めて地域と牛とのつながりの強さを感じました。その一方、短角牛の頭数は残念ながら

減少傾向にあります。頭数の現状や今後の展望などについてお聞かせください。上村 短角牛の繁殖飼養農家は平成元年が231戸、頭数は約千頭もいました。現在は53戸、430頭と半分以下になっています。これは後継者不足と、平成3年の牛肉輸入自由化による価格低下が大きな要因です。当時は牛の体重1kg当たり300円の時もあり、生活のため牛飼いに見切りを付けた方もいました。現在は生産と肥育頭数のバランスが難しい状況です。子牛があまり不足しておらず買わなくても良い状況になっています。今後、生産した子牛を肥育農家に買ってもらうようにお願いしていきたいかなければなりません。久慈地区の牛すべてを消費者の方に届けられればと考えています。

市長 経営環境が厳しい中でも前進しようという気概を感じ心強く思います。生産者と消費者がもっと強く結び合えば生産意欲も増すものと思います。佐々木 北風土の立ち上げか

いメニューとして旧山形村との合併を機に短角牛を扱い始めました。最初は売れるかどうか不安でしたが、今では収益の大きな柱の一つになっています。地元のものが売れるということ、短角牛で実感しました。生産者の顔が分かる地元の食材にこだわり、べっぴんの湯の特徴を出していくため今も取り組んでいます。

市長 生産者の顔写真や闘牛の歴史の紹介等があっても良いですね。さて貫牛さん、今までのお話を聞いて地域の魅力をPRするために大切なことは何とお考えですか。貫牛 観光とは簡単にいうと輝く土地を見に来ていただくこと。久慈の魅力伝えていくために短角牛と闘牛は欠かせないテーマの一つです。しかし短角牛や闘牛だけでなく、その歴史や背景も訴えないと外には伝わりません。今の観光産業では地域のありのままの姿を見せることが求められています。自信を持ってPRするためにも、外だけでなく内に目を向け地域の人から理解を得ていかなければならないと思っています。

市長 観光とは簡単にいうと輝く土地を見に来ていただくこと。久慈の魅力伝えていくために短角牛と闘牛は欠かせないテーマの一つです。しかし短角牛や闘牛だけでなく、その歴史や背景も訴えないと外には伝わりません。今の観光産業では地域のありのままの姿を見せることが求められています。自信を持ってPRするためにも、外だけでなく内に目を向け地域の人から理解を得ていかなければならないと思っています。

市長 観光とは簡単にいうと輝く土地を見に来ていただくこと。久慈の魅力伝えていくために短角牛と闘牛は欠かせないテーマの一つです。しかし短角牛や闘牛だけでなく、その歴史や背景も訴えないと外には伝わりません。今の観光産業では地域のありのままの姿を見せることが求められています。自信を持ってPRするためにも、外だけでなく内に目を向け地域の人から理解を得ていかなければならないと思っています。

市長 観光とは簡単にいうと輝く土地を見に来ていただくこと。久慈の魅力伝えていくために短角牛と闘牛は欠かせないテーマの一つです。しかし短角牛や闘牛だけでなく、その歴史や背景も訴えないと外には伝わりません。今の観光産業では地域のありのままの姿を見せることが求められています。自信を持ってPRするためにも、外だけでなく内に目を向け地域の人から理解を得ていかなければならないと思っています。

市長 観光とは簡単にいうと輝く土地を見に来ていただくこと。久慈の魅力伝えていくために短角牛と闘牛は欠かせないテーマの一つです。しかし短角牛や闘牛だけでなく、その歴史や背景も訴えないと外には伝わりません。今の観光産業では地域のありのままの姿を見せることが求められています。自信を持ってPRするためにも、外だけでなく内に目を向け地域の人から理解を得ていかなければならないと思っています。



観光地域の光を伝えるために

かんぎゅう としかず
貫牛 利一 (47歳・野田村)
久慈市観光物産協会専務理事
久慈を外に売り込むため東奔西走する宣伝マン。牛に強い思い入れを抱き、闘牛や短角牛をテーマとした誘客を目指す



提供地元のものにこだわって

つとむ
村田 勉 (49歳・寺里)
新山根温泉べっぴんの湯支配人
市内外から多くの人を訪れるべっぴんの湯を地域住民と手を携えて運営。提供する料理も地元の食材に強くこだわる



流通良さを広めるために

とおる
佐々木 透 (43歳・山形)
短角考房「北風土」代表
レシピ提供や料理教室を開催するなど短角牛の調理方法も熟知。豊富な知識と情熱で生産者と消費者の橋渡しをする



生産良い牛を作るために

かみむら のぶし
上村 信志 (54歳・山形)
新岩手農協短角牛繁殖部会部会長
短角牛の繁殖、生産に情熱を注ぐ。より良い肉質の短角牛に向けて粗飼料を多く与えた牛作りにも挑戦している



闘牛観光への起爆剤に

よしお
松坂 義雄 (71歳・山形)
いわて平庭高原闘牛会会長
年3回、平庭高原闘牛大会を開催。歴史にも精通し、闘牛のさらなる盛り上げと観光への活用に意欲を燃やす

外に誇れるものがある
足元にある牛の魅力をもっと感じてほしい